

「Yとクラスと向かい合い、

価値観をいかに創り直すか」

下村亮（刑部小）

1. はじめに

本学級の児童は、明るく、活発な児童が多い。休み時間は外に出る児童が大半である。本校は学級数が4クラスあり、毎年クラス替えが行われるが6年生になった時でも、まだしゃべったことのない子とクラスが一緒になることもある。1学期は4年生からの友達関係が残っており、なかなか踏み込んで人間関係を作れていないようであった。

おそらく4年生までの体育での球技学習においてゲーム中心の授業しか受けたことがないのでないだろうか。5年生になってからのバスケットボールを見ていても、運動が得意な児童が活躍し、苦手な児童は

消極的なならざるを得ない状況があった。

そのため体育の時間は、得意な児童からすればお楽しみの時間、苦手な子からすれば苦痛の時間になっていったような気がする。

また、八尾市ではクラブ活動が盛んで、小学校対抗の試合もあり勝つことに対してこだわりのある児童も多いように思う。そんな中で、学級全員の児童がバスケットボールを通じ、「わかる」「できる」を共有すること、「つながる」ということや体育の授業に対する価値観、勝負に対する考え方を見つめなおす授業になればという思いで実践に取り組むことを決めた。クラスの人数は、33人(男子16人、女子17人)である。また、小学校のクラブでバスケットボール部に所属している児童は、4人(男子3

人、女子1人)である。

2. 児童の実態

(1) クラス全体の児童の実態

- ・5年生までの球技はゲーム中心に行われてきた。
- ・グループ学習の経験はほとんどない
- ・得意な児童は積極的だが、苦手意識が強く、積極的になれない児童が多い。

(2) 特に配慮が必要なYについて

1年生のころからこだわりが強く、トラブルでかっとなる場面もあったようだ。当時の担任の先生は、ほめ方や叱り方など、配慮のいる児童ではあったが、そのほかのやんちゃな男の子と変わらなかったようである。親や担任の対応ひとつで変わる児童である印象があったようだ。

1年生のころからの、トラブルが起きた時のこだわりや、書くことに対する面、2年生の時の担任の厳しい指導や叱責により、不登校となった。3年生の1学期から3年生が終わるまではほとんど登校していない。医師からは、PTSD(心的障害後ストレス障害)との診断を受けた。PTSDは

心に加えられた衝撃的な傷がもとに引き起こされるとされており、主な症状としては、精神的な不安定による不安、トラウマの原因となった事物に対しての回避傾向、追体験によるフラッシュバックなどがある。

Yは3年生の学年末のころから登校しているが、教室に教師が5、6人と親も入り込み、トラブルがないように過ごしていた。それでも、紙の擦れる音や少し友達と肩が当たったなどのことでパニックを起こしていた。それでも少しずつ回復を見せ、4年生の最初のころには教師による入り込みもなくなった。しかし、休み時間のドッジボールなどで少し強い口調の言葉かけをされたり、ボールが自分の思うように触れなかったりすると、感情のコントロールがきかなくなり、パニックに陥ってしまう。そうなると、パンチやとび蹴りなどの技を繰り返して、自分の気持ちをすっきりさせようとする。それでもどうしようもない時は、そのまま門を乗り越えたり、塀をよじ登って家へと脱出をしていた。4年生のころは、友達とのトラブルが週に3、4回、家への脱出は、週に1回か2回か、というぐらいであった。3年生から4年生の担任の丁寧

な対応の中で、友達との関わりやYの頑張りの中で少しずつ症状は和らいできている。5年生でも、1学期から現在にかけて症状は和らいできている。友達とのトラブルの回数も減り、学校を脱出した回数も現在までで3回である。トラブルが起きても、自分でクールダウンの時間を取り、教室に戻るようになっている。4年生のころの友達は「について」「親からも、教師からも守られる特別な存在」という意識があったが、その意識も薄くなっているように感じる。Yの今抱える課題としては、自らの関わりで人間関係を築いていくことであると考えている。些細な関わり合いの中で、「ありがとう」や「ごめんな」などの自然な言葉かけが苦手で、友達とも、一歩踏み込んだ関係を築くことができていないように思う。

(3) Yについての実践仮説

Yは、習い事として1年生のころからスイミング、2年生のころから地域のサッカークラブ、4年生のころからフィジカルトレーニングを今年の1月いっぱいまで継続して行ってきていた。今年の2月からは、受験勉強を視野に入れ、地域のサッカーク

ラブと塾の2つの習い事に絞っている。またYは、私が顧問をしている本校のサッカークラブに所属している。4年生の時はボールが触れられなかったり、うまくプレーできないだけで、イライラを起こしていた。5年生の2学期ころからはそのようなことはなくなってきた。運動は得意な方で、勉強も得意である。3年生の勉強は家庭学習で親と少しだけ行っていた。その時の学習内容は克服している。現在は、90点ほどの点数をどの教科でもとり、受験を視野に入れて週に3日塾にも通いだしている。また、週に1日は家庭教師にきてもらい、学習を行っている。

Yはよく運動ができる。また、試合は勝たなければいけないという勝利至上主義の価値観も強く持っている。そのため、サッカークラブでの言動を見ていると、苦手な子に対して強く当たってしまう。そのような言葉かけを周りの子どもたちも見ていて、Yへの印象も悪くなっているように思う。そこがYの抱えている人間関係のしんどさであろう。Yは「なぜ」自分ができて、その子ができないのかが感覚的には分かっているようだが、具体的に、自分の言葉で説

明はできない。

Yはサッカーを専門としてやってきている。そのため、サッカーを教材とすると、みんなと学習を進めるという感覚がYには芽生えないと考えた。Yは深くバスケットボールを学習したことがない。そのため、技術の学習をクラスメート全員でできる。また、授業時間数にも限りがあるため、手で扱うことができ、学んだことをプレーで出しやすいと考えられるバスケットボールを選んだ。

Yがバスケットをする中で、最初のボール慣れ、シュート習熟(1次)では運動も得意な方なのでうまく参加できるであろうが、コンビネーション学習(2次)の段階になると、まだ下手な子に対してのいらだちや、それに伴ったワンマンプレーが出るのではないかと考えた。Yは運動が得意なうえに認識力もある。そのため、うまい子は「なぜ」うまくいなのか、苦手な子は「なぜ」うまくいかないのか。また「どうすれば」うまくいくのか、という技術的な側面に注目させることができると考えた。コンビネ

ーション学習(2次)でのYの課題が浮き彫りになるまでに、そのことに気付くような指導ができれば、チームメートへの言葉かけの内容も技術的なものとなり、チーム内の人間関係も良くなっていくのではないかと思う。また、自分のチームだけでなく、ほかのチームともキャプテン会議を通じて情報交換をし、自分のチームだけが困っているのではないんだという共通認識を育て、「チームのみんながみんなであうようになっていく」という見通しを持って、粘り強くチームと関わる環境を作っていく。

3. 実践の目標

本学級の児童は、バスケットボールを深く学習したことがない。まずどこからシュートが入るかを学習し、重要空間で攻防するための動きを身につけさせたいと考えた。また、苦手な児童は楽しみたい気持ちはあるが、得意な児童との関係からどうしても消極的になってしまう。そこで、得意な児童と苦手な児童が、重要空間での動き方を

「わかり」、教えあいをグループ学習で進めていく中で、子どもたち同士のつながりを作っていきたい。また、得意な児童の多くは、試合になると勝つことにこだわり、熱くなりすぎてしまうことがある。試合に勝つということもスポーツの面白さの1つではあるが、試合に向けてチームや個人でゲーム中に点を入れるための課題や目標を持ち、それをチームで振り返りチーム練習に生かしたりする作業を通して、今までとは違う試合の意味をとらえることも目標としたい。そのことがクラスの新しい価値観を作り出すことに迫れる一つの手立てだと考える。

〈実践のねらい〉

・重要空間で、フリーでシュートを打つための動き方を理解し、できるようになる。

【技術性】

・チームの中で、フリーでシュートを打つことのできる子と、できない子が一緒にフリーでシュートを打つための動きができていくかを考え、課題練習により、つ

ながりあう【グループ学習、組織性】

・リーグ戦をおこなう。リーグ戦は、勝つことだけでなく、チームや個人の課題を持ち、それを発揮することを目指すことで、今までの学習を振り返るものとする。

【社会性】

4. 指導計画（全16時間）

【第一次】

バスケットボールの感覚作り【技術性】へ
ビドリブル・コピードリブル・くやしい。
上方空間でのキャッチ、そこからのピボット。シュートゲーム、シュート調査

【第二次】

重要空間を生かした攻め・守り【技術性】

攻め／①オン・ザ・ボール

②オフ・ザ・ボール

【第三次】 大会に向けて【組織性】【社会性】

自分たちのチームの課題に合った練習を設定して課題に取り組む

大会の意義（意味）を話し合いで明確化

【第四次】 学習のまとめ

時間	内容
1～3	ボール感覚づくり ・シュート・ドリブル・パス・高いボールのキャッチ
4	・重要空間を知るためのシュート調査を行う。「シュート調査①」
5	・教室での学習 ①前時に行ったシュート調査をもとに「重要空間」を確認する ⇒重要空間を「AHゾーン」と名付ける。 ②チーム作り 各チーム4人(1チームだけ5人)の8チームとした。
6	試しのゲーム「シュート調査②」 ・ゲームの中でも重要空間からシュートが入るのか確かめる。
7	教室での学習 ・なぜAHゾーンからのシュートが入らなかったのかを考える。
8	AHゾーンからフリーでシュートを打とう
9	・2対0 ・2対1(手かせ)(足かせ) ・試しの2対2
10	みんながAHゾーンからシュートを打とう①② フリーになるために3つのポイントを意識しながら練習する。
11	・ボールを持ったらシュートをねらう。 ・パスをしたらAHゾーンにダッシュする。 ・守りの背後をダッシュする。
12	みんながAHゾーンからシュートを打とう。③④
13	バスケ大会に向けて各チームで課題を持ち、練習に取り組む。
14	大会の理念づくり 子どもたちと一緒に、より良い大会にするために理念づくりをした。
15	文化学習(バスケットボール物語) バスケットボールにかかわってきた人の思いに触れることで、歴史的観点においても大会の理念を共有した。
16	バスケットボール大会

5、技術指導の系統性

試しのゲームから7時間目の授業までは、スペースがより多く、フリーになれる機会が多くなるのではないという考えから、3対3のオールカコートでのゲームを行った。ゲームの時間は2分間とし、守りは攻めに對して身体的接触をしてはいけないとだけした。トラベリングやダブルドリブルといったルールは触れずに行った。シュートは多く出るものの、速攻が中心のゲームとなり、目標としていた重要空間での攻防の学習につながるような展開で、2対0や2対1で学習したことをゲームで試すことができなかった。また、苦手な子があまりシュートにいけない状況があった。また、ペアを組む相手はチームで好きなようにしていたところにも、苦手な子がなかなかうまくならない要因があるように思った。そこで、苦手な子と得意な子がペアを組み練習をし、その学習をゲームで確かめるため、重要空間での攻防に学習を絞るために2対2のハーフコートでのゲームとした。最後のゲーム大会では、試しのゲームとの違いを感じるために3対3のオールカコートのゲームに戻した。

6、実践の経過

第一次

1〜3時間目

バスケットボールが苦手な児童が多いため、ボール感覚を養う時間を3時間設けた。ドリブルやパス以外にも、足でボールの受け渡しを行ったり、二人でボールを背中に挟んで立ちあがったりするなど、子どもたちが楽しんでバスケットを行うことのできるように様々な活動を行った。この3時間では、ペアを組むには生活班で行った。また、チーム分けに使うために、空中にボールを投げ一回転してのキャッチや、上方空間でのキャッチ、好きなどころからシュートを10本打ち、何本入るかの調査も行った。

4時間目

重要空間を知るためのシュート調査を行った。シュートを打つポイントに黒いビニールテープを張って行った。ゴールの真下に1から5番、重要空間に6から10番、その外から11から15番の番号を打ち、ペアを作り、ひとりずつ1から順にシュート

を行った。入れば記録用紙のその番号に○をした。

5時間目(教室)

10 / 30

①重要空間を知ろう

4時間目のシュート調査をもとに、重要空間の学習を行った。15ポイントごとに、33人分の合計のシュート成功本数とその割合を子どもたちに提示した。重要空間(6から10番)でのシュート成功率は50パーセントほどであった。ほかの場所は、0パーセントから20パーセントになった。子どもたちに、「このシュートが入りやすい場所に、何か名前を付けたいんだけど、いい名前はない？」と聞いたが、なかなかいい案が出ず・・・

すると、クラスのムードメーカーの≒君が「AHゾーンにしよう！」と意見を出してくれた。なぜ「AH」かというと、私のクラスの学級目標が黒板の上に掲示してあるのだが、それが「楽しく 優しく 絆深めて AH」というもので、ことあるごとに、そのクラスの子どもたちと私は「AH、AH」言っていたという経緯がある。

そんなこんなで、次の授業からは、「AH

ゾーン」からシュートを打つための攻めを勉強していきこうという結びとなった。

②チーム作り

給食の早く食べた後の時間や授業のはじめの時間を使ってチーム作りを行った。チーム数は∞チームとした。まず、チームのキャプテンをやりたい児童を募った。≪は面倒くさがり屋で、わずらわしいことが大嫌いであるため、私の予想では手を挙げないだろうなと思っていた。≫キャプテンをやりたい人?」との問いに、ちょうど8人が手を挙げた7人は予想どおりだったが、予想外の児童が手を挙げていた。それがYであった。Yは面倒くさがり屋だが、人の意見を素直に聞くタイプでもなく、人間関係を作る上ではちよつとした責任感があった方がよいか?という考えから、キャプテンをやってもらうことにした。チームのメンバーについては、以前のシュート調査の結果や、キャッチ、人間関係をもとに私が考えたものをキャプテンに提示した。そこで、バスケットボールの力や人間関係までを考えてもらい、チームを再編成した。キャプテンは、自分のチームの都合のいいよ

うに考えるのではなく、クラス全体のことを考えてくれたのでありがたかった。Yのチームは、Yと普段から仲が良く、Yも信頼を置いているK、Yがきつく口を出しても強気でいられる女子のTとNになった。

第二次

6時間目

11 / 11 試しのゲーム

【ゲームでもAHゾーンからシュートが入るか確かめよう!】

AHゾーンからシュートを打てば、50%の確率でシュートが成功するはず、ということ、AHゾーンからシュートを打つように意識を持たせての試しのゲームを行った。ノーマークのシュート場面を多くするために、また人数が多すぎてごちゃごちゃになって適当にもなりすぎないように、3対3のオールコートで行った。試合時間は2分間。シュートを打ったところに名前を書き、成功すれば○、失敗なら×を書くという記録を取った。Yのチームを中心に見ていたが、なかなかシュートが入らない。1試合目はどちらのチームも得点なしという結果に終わった。2試合目でも、なかなかシュートは入らない。シュートを外した

≪は思わず、「なんではいらへんねーん!」と叫んでいる場面があった。ゲームが終盤に差し掛かったころ、シュートがようやく入った。AHゾーンにフリーで入り込んだKにYからのパスがつながり得点となった。子どもたちはなかなかシュートが入らず、悪戦苦闘していた。

Yの感想では、「山けん(K)がパスをもらえるとこにおってくれた」とあった。試しのゲーム中にYがAHゾーンでフリーになっているKにパスを出し、Kがシュートを決めるといふシーンがあった。その時のことを書いていふのだと思われる。YはAHゾーンからシュートが入ることや、フリーでシュートを打つことの重要性を感覚的に、このときに理解していると考えられる。また、YはKのことを信頼し、二人のコンビネーションに魅力を感じているようであった。

7時間目(教室)

11 / 19

【AHゾーンからシュートが入らなかったのはなぜだろう?】

試しのゲームの次の日、子どもたちにゲーム中のAHゾーンからのシュート成功確

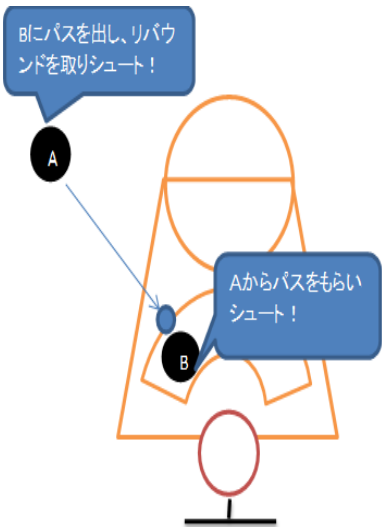
率の結果を提示した。その結果は、AHゾーンからのシュート成功確率は25%。しかも、シュートを打っていたほとんどの子どもがキャプテンを中心とする運動が得意な子どもであった。以前のシュート調査では、得意な子どもものシュート成功確率は75%であった。得意な児童の成功確率が75%から25%にまで落ちていた。子どもたちは、「なんでー」や「うぞー」のような驚きの声を上げていた。そこでビデオを見ながら、シュート時の様子を確認した。すると、子どもたちから「あせっている」や「動きながらシュートを打っている」という声が出た。「なぜあせっているの?」と聞くと、「守りがいる!」との声が出てきた。これからは、EHゾーンからフリーでシュート調査のようにシュートを打つために学習をしていこう!という課題を子どもたちと共有して締めくくった。

8時間目 11 / 19

【AHゾーンからフリーでシュートを打とう①】

AHゾーンからのシュートを授業の初めに繰り返し行った。また、毎時間10本中何

本はいるかのシュート調査を行った。練習内容はAHゾーンに入りこみ、シュートを打つために、「2対0」の学習を中心に行った。斜め45度の位置から、EHゾーンの味方にパスを出し、パスをもらったところからシュートへ行く、パスを出した人は、リバウンドに走り、ゴールの成否にかかわらず、もう一度シュートを行うということを繰り返し行った。なれたところで、パスコースの間に守り(何もしない)を置きその練習を行った。ゲームでは、AHゾーンを意識し、そこでシュートを打つとした。記録では、「いまのはAHゾーンからのシュート

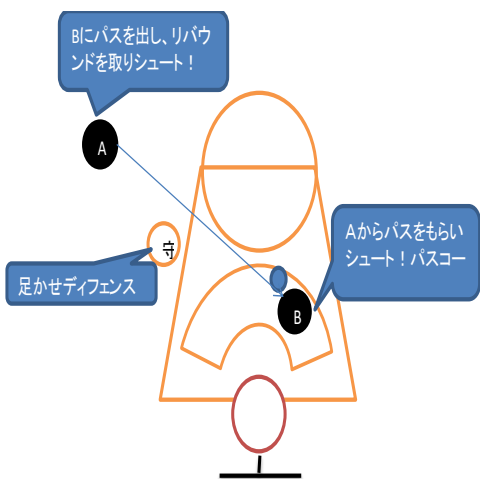


ト?」「フリーかどうかわからない」などの声があった。また、記録用紙を見ると、シュートできていない子どもが多かった。

9時間目 11 / 26

【AHゾーンからフリーでシュートを打とう②】

授業をする前に、AHゾーンが視覚的にわかりやすくするために、AHゾーンを黒いビニールテープで囲んだ。そして、各チームのキャプテンに「シュートできていない子がいないか見ておいてね」と伝えてお



いた。

学習内容は前時と同じく2対0から2対1(足かせ)で行った。この時のゲームでも、まだ苦手な子は、シュートにいけない状況があった。感想文でも、「AHゾーンからシュートが難しかった」「シュートしたけど入りませんでした」などシュートにいけない児童、シュートにもいけない児童が大半であった。また、2対2の学習では、うまい子同士苦手な子同士でペアを組み、うまいこのペアは点数を簡単に決めて満足し、苦手な子へ教えないという状況も見えた。

キャプテン会議にて

目標にしていた、全員が「わかってできる、そしてつながらる」というバスケットボールができていないと感じた。そこで苦手な児童に注目し、学び合いを進めていきたいと考えた。キャプテンに私から「チームで何か困っていることはない？」と聞くと、Y以外のキャプテンたちからは、「あの子の動きがなかなかうまくいかない」「あの子がシュートを打てていない」など苦手な子に対しての意見がでた。そんな中、Yは「何

も困っていない」という意見を返してくれ

た。その背景として、Yのチームは7時間目と8時間目のゲームで負けることがなかった。また、ゲームで出るメンバーは、YとKと女子から一人というメンバーで出ていた。出場機会を均等するために、チーム内で調整してもらっていたつもりであったが……この時に私も初めて気づいた。Yと二人で記録用紙をみながら、シュートを打っていない子はいないか、話す中で、動きができていない子はいないか。などを丁寧に見ていくと、Yも「ほんまやなあ」とつぶやいていた。そこで、私から「みんながわかってできるバスケットボールに立ち戻ろう」ということで、苦手な子と得意な子がペアを組み練習とゲームを進めること、毎時間の確かめのゲームは、AHゾーンでの攻防に絞るために、ハーフコートでの2対2とした。その話をキャプテンたちに納得してもらい、クラス全体にも話をした。

へこれまでのYについて

- ① 現在までは崩れることなく、バスケットに取り組んでいる。
- ② Yのチームは負けなし

③ チームのKとコンビを組み、そのペ

アで得点している

へYの今後予想される反応

YはKとコンビを組み、得点を重ねてきた。試合も負けることなく進んでいるため、イライラが出ている場面もない。しかし、次の授業からは、苦手な子とペアを組むことになる。苦手な子のミスに対するいらだちや負けることに対してのいらだちが出てくるのではないかと予想している。

支部例会にて

11/30

支部例会の場をお借りして、ここまでの実践の中間報告を行った。そこで、感想文の書かせ方や毎時間の授業で何を教えたいかがはっきりしない、授業中での子ども様子がわからないなど、たくさん指摘を受けることになった。AHゾーンに入り、フリーでシュートを打つために具体的な子ども動きを教えることができていなかった。また、そのことが授業終わりに書く感想文にも表れていた。感想文には、具体的な技術に関する記述が少なく、「前より点が入っていたからよかったと思う」や「パスをして攻めたらよかった」など抽象的な感

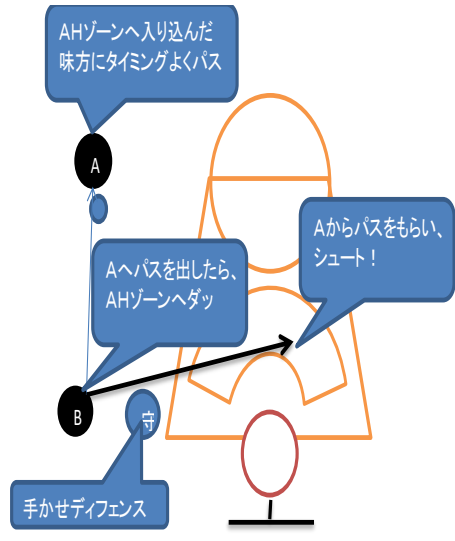
想文が多かった。そこで、次時からは「AHゾーンでフリーになるため」に子どもたちに具体的な動きを教えることにした。

10時間目

12 / 5

【みんながAHゾーンからシュートを打とう！①】

この授業では、フリーでシュートを打つために、子どもたちに2つのことを意識して練習、試合を行うように話をした。一つ目は、パスを出したらAHゾーンにダッシュすること。これを意識することでマーク



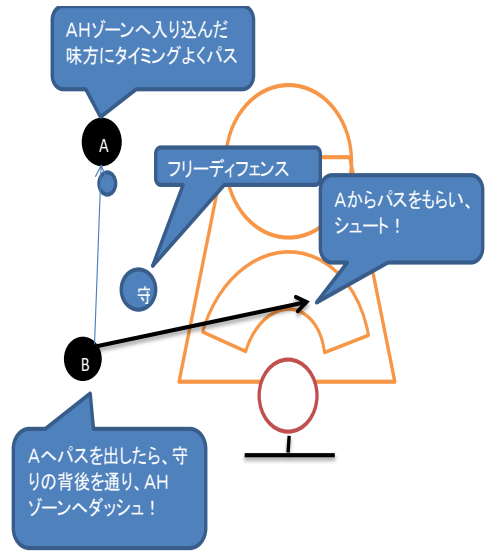
を外す動きを身に着けさせたかった。もう一つは、パスをもらったからシュートを狙うこと。ボール保持者がシュートを狙っていることで、マークの目を引き付けられ、よりフリーになると考えた。子どもたちの動きからは、ボールを持たないとき、ボールを持った時の動きがはっきりし、プレーしやすくなったように感じた。感想文には、子どもたちの実態が詳しく把握できるように、めあてに對してできたこと、めあてに對してわかったこと、友達に教えてもらったことなど、項目を挙げ、具体的に書けるようにした。

11時間目

12 / 9

【みんながAHゾーンからシュートを打とう！②】

前時の意識することに加えて、守りの背後をダッシュするというものを足した。パスを出した後は、自分のマークをしてい守りが、ボールが出た方向に目が行く一瞬がある。この時に背後を走ること、守りはマークを見失い、よりフリーでいられる時間が長くなると考えた。これは、もともと子どもたちに教えた内容として自分



12時間目

1 / 14

【みんながAHゾーンからシュートを打とう！③】

の中にあつたものだが、「AHゾーンにダッシュをする」ことを子どもたちが習得したうえでその後の守りの背後を走る、という順で行いたかった。また、移動図を使い、苦手な子がどのような動きをしているのかを把握したかったが、なかなかうまくいかなかった。

【みんながAHゾーンからシュートを打とう！④】

バスケットボール大会をするにあたり、大会をする意義を考えた時、Yの勝利至上主義の価値観にどうせまれるかを考えた。勝つということだけでなく、チームとして目標としているプレーや個人が目標とするプレーが大会で発揮され、それが自分のプレーだけでなく、チームメートのものでも喜びを感じ、目標を達成することが、真剣勝負に対する新たな価値観となればよいと考えた。これまでは、めあて設定からそれに合った練習の設定など教師主導で授業を行ってきた。この授業から、大会に向けての課題を克服するための練習課題をチームで決めさせ、取り組んだ。その際、子どもたちだけで適切な課題を決めることは難しいであろうという考えから、大阪支部の研究部の方たちに協力してもらい、チームごとの課題をあらかじめあぶりだしておいた。そして授業の前にチームで話し合いを行い、チームと私で話し合いをし、課題を設定すると次の3つが出てきた。

① チームメイトに合ったパスを出す

- ・パスを取ることが苦手の児童がいて、うまくボールをつなげることのできないチーム

② 守りの背後を走る

- ・フリーになりきれない児童がいるチーム

③ AHゾーンに入った後、パスコースがなければ、一度AHゾーンから出る動きを行う。

- ・動きができているが、守りに対応されてしまった時の次の動きを行うチーム

(Ⅲ型 空間づくりを行う動き)

ケロマツチームの感想や様子

○君に対して「パスを取ってほしい」や「パスを怖がっている」などチームからの指摘がいくつか上がっていた。チームは、○君が一番課題を抱えていると考え、○君に合ったパスを探す練習をこの時間ではすることにいった。○君は学級の中でも特に運動が苦手な方である。また、認識力も低く、コミュニケーションションもうまくとれない場合が多い。バスケットボールに対して興味があり、一生懸命に練習をする。すると、キャプテンのI君の

感想に「○君にはバウンドパスがとりやすいとわかった」というものがでてきた。キャッチできないという課題をチームは○君の変容のみで乗り越えようとしていたが、チームメイト自身の変容によってこの課題を乗り越えた。

刑部チームの感想や様子

バスケット部でキャプテンのN君を中心に練習を行ってきた刑部チーム。AHゾーンでの動きがまだまだできていないということで、相手の背後をダッシュし、ボールをもらいシュートを狙う、無理なら味方に返すという練習を課題として設定した。Hさんの感想では、「うごきがだんだんできるようになった」「うごきがよくわかりました」という感想があった。キャプテンのK君は授業の初めのころから丁寧にチームメイトにかかわってきていた成果が出てきている。

ネオジャパンチームの感想や様子

ボールをうまく回すことのできているネオジャパン。しかし、AHゾーンでフリーでなくてもシュートを打ち、シュートの成功確率が下がっていた。そこで、フリーで

なければ一度AHゾーンの外に出て、攻撃を組み直すことを目標としていた。キャプテンのO君は感想で、「みんなこんらんしていた、でもみんなシュートがよく入っていた。動きもよくなり、試合もよくなってきた。」と書いている。

バスケットボール大会を前に

14時間目 大会の理念づくり 1/24

勝つということに対してのこだわりが強いYやそのほかの子どもたちに対して、試合で勝つということだけでなく、試合結果だけでなく、今まで学習してきた成果が発揮できたのか、自分のチームメートがこの学習でできるようになったことは何かをしるなど、試合の中身にもこだわった大会にしたいと考えていた。

大会の前に、みんなで大会をする意義を考えた。まずは、「勝つ」という意見が多く出てきたが、その後、いろいろな意見が出てきた。そこで出てきた意見をまとめ、
①これまでのシュート学習の成果を試す大会

②自分たちのチームを振り返り、教え合いをさらに深める大会

③真剣勝負の面白さを味わう大会

④チームの新たな課題を発見する大会

この4つをバスケットボール大会の理念とすることを決めた。また、ルールの変遷やバスケットボールにかかわってきた人たちの思いに触れ、大会の理念をより深く子どもたちと共有した。また、試合は、8チームの総当たり戦で、3対3のオールコートで行うこととなった。

15時間目 文化学習 1/27

バスケットボールがどのようにできてきたのかをプリントを使い子どもたちと学習をした。バスケットボールの成り立ちやバスケットボールにかかわってきた人たちの思いに触れたり、ルールの変遷を知ったりすることで、大会の理念をより深く子どもたちと共有しようと考えた。しかし、まとめの感想文に文化学習のことを取り上げている子どもはおらず、どの程度効果があったのかは・・・また、授業の最後に感想を書かしていなかったため、子どもの実態を把握することがしきれなかった。

バスケットボール大会本番で

バスケットボール大会の前に理念づくりをしたからといって、簡単に子どもたちの勝つことへのこだわりが薄れていくわけでもなく・・・試合はどんどん熱を帯びていった。何かトラブルが起きる予感。案の定、YとほかのチームのキャプテンのMとがケンカをした。ケンカといっても試合中、ことあることにお互いが手を出し合った。まず、YがMにバスケットボールを投げつけ、MがYの手をたたき、ルーズボールを二人で追いかけた時にYがMに蹴りを入れ・・・試合後、Yが私に涙ぐみながら「Mの勘違いで・・・」と声をかけてきた。授業の後、原因を二人に聞いてみると、Yが放ったシュートをMのチームメートがブロック、Yがサイドラインからボールを出そうとすると、Mに「なんで？」と言われたのが発端だった。MはYがシュートしたボールがそのままコート外に出たと勘違いしていた。MはYに勘違いであったこと、手を挙げてしまったことを素直に謝った。そのあと、Yと私と二人で話をした。これ以前のYは、トラブルがあっても自分の非は全く受け入れることはなく謝ることをしなかった。わた

しは、「今日のこと、何か悪いところはなかったか？」と聞くと、Yは少し考えて「ボールを当てたところ、間違えて蹴ってしまったところ」と答えた。「悪いと思ってるんやったら、謝ってすつきりする？」、「・・・うん」、わたしはうれしくてうれしくて顔がにやけるのをこらえながらMを呼びに行った。YはMに謝り、仲直りすることができた。

7. 実践の成果と課題

① Yの変容について

Yは11月11日と11月19日の感想に、「負けなくてよかった」「また引き分けた」と書いていることから、勝つことへのこだわりが強いことがうかがえる。感想文では、苦手なNへの「文句言わなかった」やTへは技術的なことを否定的に書いている。しかし、1月14日の感想文では「Tがうまくなってきたような気がする」とあるように、チームメートに対して受容的な側面が出てきている。また、Nの感想では、11月26日にYとの関わりのある記述が、また、12月5日から12月9日にかけては、「Yからの

注意」という表現から、「アドバイスを受けた」という表現に変わっている。このことから、Yのチームメートへの関わりが少しずつ変容していると考えられる。

② Yの勝負に対する価値観はどうか

・バスケットボール大会最終日、Yのチームは2連敗で終わった。この2試合に勝てれば優勝が見えていた。1試合目の前半、Yは試合には出ていなかった。Yはコート横から大きな声で指示を出していた。Y以外のK、T、Nで出場する番であった。対戦したチームはYのチームと同じく優勝を争っているチームであった。試合の展開は、Yのチームが前半に4点差を広げられてしまうものとなった。女子のTとNはうまくなっているものの、うまくパスをつなげることができない。Yはコート横から、「マークにつけ！」や「動け」とチーム全体に支持をしていたが、途中からはKに対し「ひとりで行け」「パスせんでいい」という、Kに対してワンマンプレーを求めるものであった。Yが出場した後半にも点差を埋めることはできずに負けてしまった。試合後、かなり感情があふれ出していた。跳

び箱を乗せる台をガンガン蹴り続けていた。仮説に立てていた、Yのイライラがとうとう優勝が懸かったゲームで出てきた。これまでのゲームは練習試合であり、Yにとつては、そこまで重要でなかったのかも知れない。このことから見ると、やはりYの勝負に対する価値観はまだ崩せるところまではいっていないといえる。しかし、その9分後に試合目が始まる時になると、ケロッとした顔でゲームに参加していた。今までのYなら、「このようないことがあると、必ず調子を崩し、次のことに切り替えることはできていなかった。なぜ今回は切り替えることができ、次のゲームに参加することができたのだろうか。

その日の振り返りや感想文を書いていた時に、1試合目のことを振りかえっていた。そこで、Yは「俺がもっとスペースに動いてという声掛けを忘れていた。」という言葉チームメートに伝えていた。試合に負けたことを苦手な子の責任として押し付けるのではなく、苦手な子に対して技術的な言葉かけをしていなかったと自分でも反省しているようであった。10月のころは、TやNに対して、「何言っても聞かん」というあ

きらめムードな発言が多かったが、最後の感想には、「Tは大きく動けるようになった」と書いている。バスケットボールの技術学

習の中で、教え合いや技術的な言葉かけを粘り強く行うことで苦手な子もうまくなつていくんだ、という感覚が生まれているのではないだろうか。また、自分の言葉かけで苦手な子がうまくなつていく過程を実感することでY自身の自信にもつながったのではないか。それが今回の崩れかかったYをバスケットボールに引き戻したのではないかと考えている。また、大会理念の②自分たちのチームを振り返り、教え合いをさらに深める大会、というところがYに深く入っていたのかもしれない。

③ 目標についての考察

・重要空間で、フリーでシュートを打つための動き方を理解し、できるようになる。

【技術性について】

成果

まとめの感想文にどのように動けばフリーでシュートを打てるのか?という項目を作った。その感想文からフリーでシュート

を打つための動き方を理解しているかを確認した。

・「AHゾーンに走りこむ」という記述があるもの・・・II型

・「AHゾーンに自らスペースを作り出す動き」のある記述・・・III型

・どちらもない記述・・・今回の目標に到達していない。

このように分析したところ、34人中30人にII型もしくはIII型の記述がみられた。

また、ネオジャパンに関しては、自分たちで課題を考える12時間目、13時間目の授業で「攻撃を作り直す」III型を課題として行ったため、まとめの感想にもIII型の記述がみられた。

II型の記述としては、「相手の後ろにダッシュする」、「マークしている人に見つからないように後ろを通ってシュート!」、「デIFエンスの後ろで動く」、「デIFエンスの後ろを通って素早くAHゾーンに入る」など、相手の背後を走るといった記述が多く目立った。これは、8時間目と9時間目に行った授業が大きく影響していると考えられる。

課題

練習の中では、パスをもらったらシュートを狙う、パスを出したら守りの背後をダッシュし、AHゾーンへ向かうというように動きがはつきりしているため、大きく動いている。しかし、ゲーム中は状況が変わり続けるため、その状況を判断し動くことがまだまだ難しく思っている児童が多い。

【グループ学習、組織性について】

・チームの中でフリーでシュートを打つことのできる子と、できない子が一緒にフリーでシュートを打つための動きができていくかを考え、課題練習により、つながりあう。

↓10時間目、11時間目の授業でつながりあいがいより深くなったのではないだろうか。それませも教え合いという形はあったものの、得意な子が苦手な子に対しての一方的なかかわりであった。しかし、10時間目からは、苦手な子に対して、得意な子がバウンドパスならキャッチできるなど、新たな発見があり、得意な子自身のプレーを変えようとした要因となったように思う。このことから

チームメイトに対して新たな価値観が生まれたのではないだろうか。

トボール大会をしてよかったです。

【社会性について】

・リーグ戦をおこなうことができる。リーグ戦は、勝つことだけでなく、チームや個人の課題を持ち、それを発揮することを目指すことで、今までの学習を振り返るものとする。

↓N A M A T U K A S A M A K A ジャパンのキャプテン、N君の感想から

バスケット大会をしてみて、みんなチームワークを学べたし、簡単と思っていたバスケットが結構難しいと分かった。仲間を助けたり、自分も助けってもらうこともあり、自分の心もちよつこだけと思うけど、みんな変わった気がします。バスケットボールは、みんなが楽しめて、難しいところもあつて勉強になるスポーツだと思いました。キャプテンをしてみても、みんなをまとめる力が僕にはまだ少ないです。キャプテンになれるのは勇気があつて自分を信じられる人です。僕には自分に少し不安があり、試合中もすべしあきらめたりしてしまいます。バスケットボールをして、楽しかったし、いろいろ学びました。バスケット

文化学習で行った誰もが楽しむバスケットボールを感じてくれた一人であると思う。また、勝利至上主義の価値観が強い彼にとって、キャプテンという立場から自分のチームを見ることがよつて、自分に足りないところを見つけて、自分ができるようになったところを、自分がこのバスケットを通して変わったところを感じたりしたようだ。